

平成20年度 第1回 学校運営協議会議事録

平成20年5月2日(金) 19:00～20:40

於：秋津小学校 2階 会議室

司会：恵藤，鮎川 記録：山田

<参加者>

小野千亜希(秋津小PTA副会長)	江橋留美子(秋津小PTA書記,保護者)
鮎川由美(秋津まちづくり副議長,地域住民)	沖田智信(学校体育施設利用団体代表,地域住民)
原田靖久(社会福祉協議会秋津支部長,地域住民)	菅久(秋津小校長,学校教職員)
恵藤公男(秋津小教頭,学校教職員)	平山宣尚(秋津小教務主任,学校教職員)
山田芳実(秋津小研究主任,学校教職員)	天笠茂(大学教授,学識経験者)
若崎光美(教育委員会指導課長,行政機関職員)	長谷川隆(教育委員会青少年課長,行政機関職員)
麻生美智子(人権擁護委員・学校支援ボランティア代表,校長推薦)	竹林輝夫(学校支援ボランティア代表,校長推薦)
橋村清隆(秋津コミュニティ会長,校長推薦)	

教育委員会から

1 辞令交付

(教育委員会から委員へ辞令交付 - 省略)

2 教育総務部長より

平野：学校運営協議会。新しい学校運営の仕組み作りに取り組んでいることに、お礼を申し上げます。文科省の指定の時には、いろいろな苦労があったと思う。今年で3年目と思うが、先日、学校評価のまとめや成果と課題の書類を見た。今までの苦労に感謝したい。校内にはトンボが生き生きと描かれている、子どもも生き生きしていると報告を受けている。そうした子ども達のために、学校運営協議会やパートナー会議が連携して、地域に開かれた学校作りや地域に支えられた学校作りをこれからもめざしてほしい。

3 その他・連絡事項

(なし)

学校運営協議会委員 自己紹介

(天笠より右回りに自己紹介 - 省略)

第1回学校運営協議会会議

1 役員選出

互選により鮎川に決定。

鮎川：本年度は3年目になる。よろしく。副委員長を誰にするか。去年は橋村さんだった。

麻生：本人は遅れて今いないが、橋村さんがよい。

(多数の賛成の声)

鮎川：橋村さんをお願いします。

2 報告事項

(1) 平成19年度第3回学校運営協議会議事録

平山：(資料1に基づいて提案。)

鮎川：議事録にあるが、昨年、教職員の数が減ることを知り、職員を減らさないように要請した。自分と石井前校長とで、市教委と県へお願いした。3/25付けで要請したら、1週間目にさっそく職員増の回答があった。やった甲斐があった。県の方にはいろいろな考えがあったと思うが…。お陰で、平山先生は学級を持たずに済んだ。飼育のえさが不足し、地域に知らせたらすぐに反応してくれた。素早い反応がうれしい。情報発信の大切さを感じた。

3 協議事項

(1) 平成20年度学校経営の基本方針について

菅：(資料2に基づいて提案。)

天笠：この資料は昨年我々が承知したものの。本年度、校長が変わったからといって説明の必要はなく、校長としての意見を出してよい。そのまま踏襲する必要はない。校長として強調することはないか。

菅：特にない。石井前校長と同じ考えを持っている。今後、子どもの様子を見て付け加えることがあれば付け加えていく。コミュニケーション、挨拶が大切と感じている。本校に不登校児童はいない。よいことだと感じている。引き続きこのまま続けたい。

天笠：図のことだが、「わかりやすい」を基本にしてほしい。例えば、本年度の重点だが、中味ではなく、私たちにもわかりやすくしてほしい。そうすると、自分たちも意見を言いやすい。

鮎川：その話はパートナー会議でも出た。

小野：これだけ文字があると、保護者の中には読まない人もいるだろう。

鮎川：もっと単純化した方がよい。やりたいことがたくさんあるのはわかるが、重点をわかりやすく素直に書いた方が取り組みやすい。

天笠：私たちは、地域の人に理解していただく責を負っている。まず、自分たちが共通理解できないといけない。わかりやすく、共有できることが大切だ。

小野：単純にした方がわかりやすい。

天笠：これが、年度末の評価につながる。この項目で評価すればよい。項目の羅列ではけない。大切になってくる。

若崎：昨年、「具体的に」という話が出たことが記憶に残っている。例えば、「授業の工夫改善」は、どこを改善するのか。校長は赴任したばかりなので教頭、教務、研究主任が中心となって考えてほしい。

鮎川：授業の工夫改善は、学校でがんばってもらわないと自分達も協力のしようがない。具体的に提示してほしい。

天笠：自分達が了承するということは、自分達が応援するという事も含まれている。

原田：こうしたことは、1つだけに徹底したほうがよい。あれもこれもと欲張ると、虻蜂取らなくなる。自分の言葉で挨拶する…、一つのことを徹底することはよいこと。地域やそこに所属する団体ががんばると、子ども達もがんばれる。重点目標も1つでよい。

麻生：1点集中ではなく、校長の考えに賛成だ。

原田：1つに集中すると、他に広がっていく。

麻生：今までと違い、わかりやすい言葉で表現されている。コミュニケーションはとても大切。

小野：学校教育目標があり、「国際社会に生きる日本人」が中心なのだと思う。生きる力、体力、いろいろつながっている。麻生さんと同感だ。核があり、3つの手段がある。1年

間で教育するのだから、やることを明確にとらえることは大切。

竹林：2つ、3つとあってよい。挨拶運動、3年目だが、ほとんどの子が、今は挨拶をしてくれる。してくれなければ、こちらからすればよい。2度3度すれば、嫌でも挨拶を返すようになる。高学年は恥ずかしがる。低学年からが大切。挨拶運動はよいことだと思う。3年目でやっと実ってきた。

恵藤：竹林さんは、いつも声かけをしたり立ち話をしたりしたりしてくれる。誰にでも。このことが、挨拶や表現にとっても関わっている気がする。皆が関心を持ってほしい。

江橋：挨拶はよいことと思う。

小野：大切なのは挨拶をきっかけに相手に窓を開くこと。こうしたきっかけ作りも皆でやらないといけない世の中というのも不思議だ。

麻生：七中では、「あ」は「明るく」、「さ」は「先に」というように、それぞれ意味付けがされている。

鮎川：校長も言ったが挨拶は心の窓、挨拶ができなければ自分の言葉で表現できない。人が生活を維持するには体力が必要。重点目標には人としての基本が表現されていて良いと思う。原田さんが言ったように1つにする方法も良いと思うが。

原田：全部を追うのは大変。多ければ多いほど散漫になる。一つをまず追っていくことが大切。だんだんと他へ波及していく。

橋村：挨拶は大切。家族同士で「おはよう」といっているか。運動する子を見ていると、走り方を知らない、ボールを投げられない。基本的なことを覚えてほしい。

長谷川：挨拶は家族から友達、地域へというように身近なところから広がっていく。これがコミュニケーションだと思う。表現は伝えること、相手がいる。聞くことも重要。話すとき聞かせることをセットで考えてほしい。

鮎川：この3つを本年度の重点目標としたい。(皆、承認)是非、シンプルに改善してほしい。

(2) パートナー会議運営要項について

平山：(資料3に基づいて提案。)

鮎川：「パートナー会議運営要項」の変更部分は「5 委員」。学校支援ボランティアは4名になっているが5名にしていきたいという希望を持っている。公募による委員は保護者の参加を期待して、3～5名と間口を広げてみた。実際には、参加を希望する方はいなかった。現在は3名であるが、気長に待ちたい。学校支援、「地域で遊ぼう」(課外授業)はボランティアがやってくれている。今年度からだが、遊び支援に入ってもらっている。どんどん広がっている、このままでよい、とパートナー会議では理解している。人数そろわなくてもよいと考えるが、どうか？パートナー会議に出席できない人の代わりの人も出席してもらおうようになった。

(特に意見が出ないので承認。)

(3) 今後の活動方針について

平山：(資料4に基づいて提案。)

若崎：人事について。委員会として是非12月中に具申してほしい。是非そうしてほしい。学校運営協議会として、委員会に具申する形にした方がよい。予算の執行について。相談があれば、早めに委員会へ来てほしい。教育総務部、学校教育部長へ意見集約していくとよい。

鮎川：予算も人事も年明けでは遅い。去年は、手続きがよくわからなかった。臨時の委員会を開き話し合った方が、記録に残る。年3回だがきちんと会議の形式の形をとることが大切。今年度は、臨時を含んで4回開きたい。校長が人事で動き始める時期がよい。学校

運営協議会と校長の人事案が一致しないのはおかしい。12月中に予算の件も含め、この場で話し合いたい。実績があると、規約の変更が可能になるかもしれない。

天笠：周囲はこの様子を注視している。千葉県中が注目している。効果や影響は大きい。後に続く学校ができるかもしれない。パートナー会議の「支援システム」という言葉はよい言葉だ。機能しているのか自己点検、自分たちなりの自己評価をしてほしい。「支援」が本当の支援になっているか。それぞれ様々な事情を抱えていると思うが、支援できているか。この点の評価を進めていくことが大切。本年は支援の評価を進めてほしい。学校評価、我々が評価の対象にもなっている。我々がどう評価されるのかということも考えねばならない。たとえば、この会に市教委が入っていることはどうなのか。長短両方ある。課題として意識する必要がある。または、委員会の立場から検討の余地がある。人事、今年の本校の異動の結果、例えば年齢構成、校務分掌等は、報告事項である。教育課程を報告することと同じであると思うので、報告をお願いしたい。

竹林：安全支援は今8名。5箇所だが人手が足りない。PTAの応援ほしい。昨日の全校遠足で、仲間が倒れた。自分も熱中症になり、今、熱がある。どこの家でも忙しい時間なので、急には代わりが見つからない。

鮎川：パートナー会議が中心になり、遊び支援システムと情報支援システム以外のところも、皆で何とかしていきたい。

天笠：どうやって裾野を広げていくかが難しい。

鮎川：パートナー会議で改善していきたい。今日は、本年度の大きな点2つを提案してもらっている

橋村：学校評価、パートナー会議で説明を詳しくしてほしい。

天笠：学校評価、いろいろなところで模索している。試行錯誤でも結果が出れば情報提供になる。

鮎川：3つの重点を評価するような内容にしたい。パートナー会議で話し合っていきたい。大きな流れとして、本年度の重点を承認するか。

(皆、意義なく承認。)

4 その他

若崎：「成果と課題」、「学校評価」を教頭から委員会へ提出してもらった。委員会内部で報告した。成果として次のことを報告した。「1 保護者や地域住民のニーズなどが学校経営に反映されている。」「2 学校支援ボランティアと教師が入念な打ち合わせ等を行い、両者が一体となって取り組んでいる。」「3 学校が積極的に情報発信したり情報提供している。開かれた学校学年学級経営に教師が意識的である。」

< 次回の予定 > 第2回：10 / 20 (月)

臨時：12月中旬以降

平成20年度 第2回 学校運営協議会議事録

平成20年10月20日(月) 19:00~20:40

於：秋津小学校 2階 会議室

司会：恵藤，鮎川 記録：山田

<参加者>

小野千亜希(秋津小PTA副会長)

沖田智信(学校体育施設利用団体代表，地域住民)

菅久(秋津小校長，学校教職員)

平山宣尚(秋津小教務主任，学校教職員)

天笠茂(大学教授，学識経験者)

長谷川隆(教育委員会青少年課長，行政機関職員)

竹林輝夫(学校支援ボランティア代表，校長推薦)

鮎川由美(秋津まちづくり副議長，地域住民)

原田靖久(社会福祉協議会秋津支部長，地域住民)

恵藤公男(秋津小教頭，学校教職員)

山田芳実(秋津小研究主任，学校教職員)

若崎光美(教育委員会指導課長，行政機関職員)

麻生美智子(人権擁護委員・学校支援ボランティア代表，校長推薦)

1 委員長あいさつ

鮎川：行事もほぼ終わった。教育目標も昨年よりよくなった。皆さんのお力をお借りしてよりよい秋津小にしたい。

2 校長あいさつ

菅：本年度の教育活動が半分が終わった，順調にしている。支援システムが機能しているため。公開を控えているが，今後もよろしくお願ひしたい。厚焼き卵の件だが，秋津小は関係なさそうだ。確認がとれたら連絡する。

3 報告事項

(1) 第1回学校運営協議会議事録について

山田：(資料に基づいて報告。)

(2) これまでのパートナー会議および教育活動について

山田：(資料に基づいて報告。)

鮎川：補足，公募委員1名増。HP更新も随分進んでいる。画像掲載の件もアンケートを採って進めている。

原田：HPについて反応はあるのか。

恵藤：全国から，時折だが本の注文がある。

小野：友達が見ている。

鮎川：更新作業，本年度はきちんとするようにしている。安全支援ボランティア，竹林さん中心にがんばってもらっている。大勢が登録し増えてきた。

竹林：朝の登校はうまくいっているが，一人仕事が入り，皆でやりくりしている。子どもの欠席が気になる。

小野：子どもの欠席人数まで，よく把握していると感じる。

竹林：夏に大病を患い，体に不自由を感じている。

4 協議事項

(1) 平成20年度学校評価について

平山：(資料に基づいて提案。)

天笠：年度末アンケートのスケジュールだが，教職員へは11月26日にアンケート配布，
1月19日に保護者・地域住民へアンケート配布となっている。これを逆にした方がよいと
考える。つまり，保護者・地域住民の声を聞いた上で教職員にアンケートを実施した方がよい。
平山：具体的な教育活動に直接関わっている教職員と子どもに先にアンケートを実施，それを受けて
保護者・地域住民にアンケートを実施しようと思っていた。
天笠：地域保護者の声を聞いてから先生方は評価すべき。この計画では教師と保護者のアンケートが
別々で2本立てになってしまう。まずは地域の声を聞き，その声に教師が対応しているのかい
ないのか，というアンケートを実施しないと，このアンケートは意味がない。
小野：一保護者としては，何のためにアンケートをとるのかわからない，学校の目的が見えてこない。
沖田：パートナー会議で，この問題については話し合っている。来年度の学校運営に生かすのだと
理解している。
小野：結果を見ても「これは何なの」という感がある。
沖田：アンケート結果を出すだけでは終わらない。
恵藤：アンケートの結果（まとめ）の出し方に工夫があればよいということか。
鮎川：保護者が読んでわかるよう具体的であるとよい。
天笠：折々のアンケートが大切，場合によってはそれだけでもよい。高い抽象度はいらぬ。
授業参観や運動会のあとの声を，学校は確実に受け止めていると思う。
モニター制度を加えてもよい。その結果をもとに学校評価を実施し，その結果をパートナー会
議に提出，議論してもよい。その後，パートナー会議の結果をこの会議に提出すればよい。
実際には計画が既に進んでいるので，これはこれとして受け止め，問題意識を持って欲しい。
沖田：1月の保護者のアンケートに問題があるということになってしまうが。
恵藤：授業参観後にこのアンケートに替わるものを出し，質問等には回答は出している。
それを元にして，もう一度教職員が自己評価をする，と考えてよいか。
天笠：参観のあとの声は実質的な評価。ただ，それが保護者や地域にどうフィードバックされている
のかという点が，十分に見えない。
沖田：今から案をたたいておいた方がよい。
菅：我々は頭が堅い。半年すぎた時に考えを出せば，と思う。
鮎川：皆が先進的，柔軟でありたい。

（2）人事・予算に関する意見要望について

恵藤：昨年度，教員増置は大変だった。来年度は「いじめ不登校等」で要望した。
昨年度と同じような要望を出している。
鮎川：県から「優遇」してもらっている感がある。万が一の時にはまた手を打つが，大丈夫ではない
かという見通しだ。予算やお金で困っていることはないか。コミュニティ・スクール用の「柔
軟な予算」はあるか。
若崎：特別な予算はない。
天笠：秋津だけに特別な配慮はあるのか。
若崎：ない。が，秋津小は相談に乗ることができる。
天笠：やっと，この秋津小もお金の話題が出るようになった。固有のファンド（と運用）を持つ地域
運営学校もある。特色ある学校運営をするならば，同然，お金の話が出てくる。
若崎：独自の予算の建て方をして要望する，といった方向をとってはどうか。
鮎川：次年度に向けて相談してもらえれば，何とかなるかもしれない。
菅：流用はできない相談ではない。

天笠 独自のファンドを作っても認めてくれるのかという問題がある。

菅 : 学校でお金を持つということを, 時代が許さない。

若崎: 趣旨をはっきりさせ相談することが重要。

天笠: 地域運営学校として独自の経営をしているんだということを, アピールすることは重要。

若崎: 教務主任の件も, 県教育庁が, 県唯一のコミュニティスクールとして意識したのではないか。
この制度を機能させていかななくてはならないという考えがあったはず。

鮎川: コミュニティスクールとしての加配を認めてもらおうと, 今後, コミュニティ・スクールが増えていく要因になるかも知れない。

原田: コミュニティが学校の光熱費を使っている。昨年の実績が本年の予算になるのか。

菅 : そうだ。その程度の予算は学校の予算でまかなえる。

沖田: パートナー会議などで話し合ったことに予算が付くことが大切だ。

原田: 交通安全指導の雨カップなどは要望としてだせるのか。

若崎: 他校からも同様の要望があるので無理。

鮎川: 習志野市は3年間, 年間で200万円。県内の他市では, 状況が異なる。書類の関係でお金をいただけるのは早くても11月。消耗品だが, 去年は50000円, 今年は49000円だ。
なぜなのか。

若崎: 予算の3パーセント削減のためであろう。秋津小だけの話ではない。全体のバランスを考えてやっている。

天笠: 秋津小独自のファンドは研究的な意味では是非認めてほしい。グッズなどを売ってファンドを積み上げている学校もある。人事や予算を議論できること自体が独自性であり, すごいことだ。

鮎川: 自腹で出費している人も多い。お金のことは, まだ全体が見えていない部分がある。見えてくると, 名義や管理の問題も含め, 議論がもっと活発になるだろう。オープンスペースのじゅうたんの補修の件は?

恵藤: 市に要望しているが, とても高価。

菅 : 学校の予算流用の範囲を超えている。

鮎川: 地域でためたお金で, 学校施設を直すことは可能なのか?

菅 : 施設の改造になるので, それはできない。物を買うことはできる。今後, 方法については研究する余地はある。

5 その他

(1) 第11回公開研究会について

平山: 資料に基づいて提案。「伊藤」の氏名を「全体協議会」や「書籍販売」へ入れる。

(2) 次回開催日の確認

- ・第1回の会議で決定した臨時会議(12月)は, 今のところ必要がないので開かない。
- ・次回の会議は3月3日(火)19時から開催する。

以上

平成20年度 第3回 学校運営協議会議事録

平成21年3月3日(火) 19:00～20:30

於：秋津小学校 2階 会議室

司会：恵藤，鮎川 記録：山田

<参加者>

小野千亜希(秋津小PTA副会長)

沖田智信(学校体育施設利用団体代表,地域住民)

菅久(秋津小校長,学校教職員)

平山宣尚(秋津小教務主任,学校教職員)

天笠茂(大学教授,学識経験者)

長谷川隆(教育委員会青少年課長,行政機関職員)

竹林輝夫(学校支援ボランティア代表,校長推薦)

鮎川由美(秋津まちづくり副議長,地域住民)

原田靖久(社会福祉協議会秋津支部長,地域住民)

恵藤公男(秋津小教頭,学校教職員)

山田芳実(秋津小研究主任,学校教職員)

若崎光美(教育委員会指導課長,行政機関職員)

麻生美智子(人権擁護委員・学校支援ボランティア代表,校長推薦)

<傍聴者>

井上卓己(千葉県教育庁教育次長)

長尾正利(千葉県教育庁教育振興部生涯学習課学校・家庭・地域・連携室副主幹)

亀井正則(千葉県教育庁葛南教育事務所社会教育主事)

(傍聴者3名自己紹介)

1 委員長あいさつ

鮎川 秋津小が学校運営協議会制度となって3年目,平穩無事に過ぎているので,時々「喝」を入れたい。新任の(若い)先生に感謝状を差し上げる。

2 校長あいさつ

菅 今夜は寒く,雪が心配。今日からインフルエンザで3年1組が学級閉鎖。明日予定の「6年生を送る会」は1週間延期となった。これまで,学校行事は順調に進んできた。

あとは卒業関係の行事を残すのみとなった。ほとんどの子ども達は卒業後,七中でまた地域のお世話になる。よろしく願いたい。学校運営協議会の3年間の指定が切れるので,現在継続手続きをしている。

3 報告事項

(1) 第2回学校運営協議会議事録について

山田 (資料に基づいて報告)

(2) これまでのパートナー会議および教育活動について

山田 (資料に基づいて報告)

4 協議事項

(1) 学校評価の公表資料について

平山 (資料に基づいて提案)

鮎川 パートナー会議で検討した時は,昨年より回答率が悪かったという意見があった。

平山 昨年度は100%近い回答率であったが,今回はおよそ半分になった。

天笠 教師の自己評価と地域の評価,どういう順番か。

平山 2学期末に教師と子どもにアンケートをとった。

天笠 教師はこのデータをまだ見ていないのか。「公表」とは何を公表するのか。

平山 教師は,まだこれらのデータを見ていない。「公表」とは,ここでの議事録を含めての公表である。

- 天笠 これら全体をどう評価するのかということの公表も含めて、課題があると思う。本来は、保護者・子ども・地域などの声を聞いて教師がどう思ったか、どう受け止めたかが大切。その結果を見て自分たちがどう思ったかということが必要。
アンケート結果から、教師がどういう指導をしたのか、学校がどう取り組んだのか、ということもこの場における評価の対象にせざるを得ない。
- 小野 資料は見やすい。今の話は、「ここまでやった」「この結果に対して何かアクションを起こしたい」ということも含めて、資料を作成すべきとの意なのか。
- 天笠 地域の声はこうである、それを聞いて教師はそれをどう思ったのかが知りたい。今の話だと先に教師のアンケートをとってしまっているの、地域・保護者の声が教師に届いていない。教師・子ども・保護者らの声が順番に並んでいるだけである。
我々の仕事は、これらの声をどうとらえ、どう統括するかということである。
- 原田 評価というものは難しい。こういうやり方しかないのかと思う。確かに、ただアンケートを実施すればよいと言うものではなく、結果を次に生かすことが重要である。
地域・保護者の声を聞きそれをどう生かすかが重要という意見に賛成。話は違うが、「自分の言葉で表現できる子」という部分があるが、子ども達を書いたものを見るとこのことがわかる。2・3年生からもらった手紙を見ると書き方が変化しており、子ども達の成長がわかる。「書く」という作業は難しいことであり、よいことだ。本校で、4～6年生にああいう場は用意されているのか。
- 鮎川 4年生は落語のお礼など、書く場が用意されている。
- 竹林 餅つき大会などで、5年生からも礼状はもらっている。
- 原田 独居老人などに、子ども達に返事を書いてくれと頼んではいるが、確認はしていない。
書くことは自分の言葉で表現することのよい訓練になる。
- 小野 保護者は自分がアンケートに回答したことや、そのことについての先生方の対応に興味がある。が、学校での取り組みについての返事はまだないが...
- 平山 これまで、こうしたアンケートは学年末に行っていたので、返事を出しづらかった。
来年度はこうしようという目標を決めるためのアンケートであった。年度途中での経過が見えるような評価でないといけないと思う。
- 沖田 そうした話が出たのは10月で、その時はもう方向転換できなかった。仕方がない。
- 小野 何頁もの資料を作ってもらっているが、全て読む方がどれだけいるか...
- 沖田 よいアンケート結果が出ていると思う。パートナー会議で個々の問題が出ていたが、このアンケート結果にはそのことがでていないが、それが鍵になっているような気がする。
アンケートの中で、教師がいろいろ指導していることがわかる。マニュアル化する訳ではないが、そこには一つの方向性を感じる。
- 麻生 6年間、2年生にかかわってきているので、どの子のあいさつも、ほぼわかる。2年生だけにかかわっている方にはアンケートに回答しづらかったということなので、この結果を地域の人はどう見ているかということになると、地域の人にはわからないのではないのか。これはこれで、来年度の目標設定の際に活用できればよいと思う。
2年生は、1年間かかわっている中で、「話す」「書く」などの成長が見えた。2年生には拍手を贈りたい。
- 竹林 4～6年生とばかりかかわっているの、下の学年のことはわからない。が、4年から5年、5年から6年と1年間を見ていると、文字の角度が違ったり話す内容が違ったりと、成長が見える。保護者の（回答率が）「57%」という数字が疑問だ。保護者は、極端に言うなら、100%の回答でないといけない。57%はあまりにも低く、保護者が学校に対してどう考えているのか判断しづらい。必ず回答しなくてはならないものではないが、どこまでが親の責任なのか、疑問だ。せめて、80%位は...
- 平山 今回のアンケートで失敗したのは、家庭数で配ってしまった点だ。「うちは子どもが3人いるので、アンケート用紙が3枚ほしい」という声があった。「おしなべて...」

ということを言いたかったのだが，兄と弟では違う。

天笠 今回，アンケートを実施してみてどうだったかの。集計の仕方，雑務，課題などが見えたか。以前は網羅的だったが今回は3つの点に焦点化している。

平山 以前は集計に1ヶ月以上の時間がかかった。昨年は，自分と昨年度の教務主任で集計したが手が足らず，地域の方にもお願いした。

天笠 昨年は時間がかかる割に課題が見えなかった。今回は課題が見えてくる。この方法の方がよい。

沖田 アンケート中のコメント欄に具体的に記入されている。

天笠 「学校目標云々」より「3つの目標についてがんばってきたがどうでしょうか」と聞かれた方が，答えやすい。

平山 コメントが絞られて書かれているので，まとめやすかった。

天笠 秋津の地域性が学校に対して「優しい」のか「シビア」なのか，というのは，この辺の見方によって分かれてくる。「そう思う」「やや思う」をどうとらえるのか。

これらを分けて考えるか一緒に考えるか。「そう思う」だけを見ていくと，状況は結構厳しい。反対に「やや思う」を一緒に集計すると，この学校は随分と良好に見えてくる。状況をシビアに見ていくか否かは，校長らの立場によるが，「そう思う」を増やさなくてはならない。消極的なサイン（曖昧な立場，「やや思う」）が増えることより，「そう思う」という確たる意見が集まることへの努力が必要なのではないか，全体として。

きちんと取り組んでいるところは「そう思う」が多くを占めている。「やや思う」が多いのは要注意。それを「良」とするより，学校としてきちんと取り組んでいかななくてはならないととらえるべきである。

p7の7（設問：「子ども」わたしは，自分の気持ちをはっきりと言ったり書いたりすることができる。）これをどう見るか。他と比べても，「あまり思わない」「思わない」が多い。自分の気持ちをきちんと言ったり書いたりできない子がこれだけ存在しているということだ。これをどういう課題と見るか，ということが学校・教師に問われている。これを教師はどう読むのか。この結果から，国語以外の時間にも「こう指導している」という指導の改善につながっていく。

そうしたデータのとらえ方と指導の改善をつなげていく形が次への指導の改善につながる。他の項目もそうしたとらえ方ができるものがあるはず，そうした状況の分析と1年間の実践の改善の方策が示される，これが学校評価である。そうしたデータの読み取り方をしてほしいという要

若崎 ボランティアの回答に「あまり思わない」が多いが，この原因は何なのか。短期目標を決めてどうアクションするのか，ということが学校に問われている。これは学校現場全体の問題だが，今すぐできることがあるような気がする。例えばp4に「あいさつはできていても，言葉遣いがよくないような気がする。」「学校で『なぜ挨拶が大切か』を教えてほしい」という意見があるが，教師がどう取り組んでいくのかということが%を増やすことにつながっていく。アンケートに答える時，中心化傾向であり極端にならないように回答する。教師が丁寧に対応することが大切。

長谷川 どこまで具体的に課題を立てられるか。抽象的では抽象的な方策しか出てこない。次年度計画が決まるだと思うので，この中にどこまで具体的に方針を示せるか。「結果の考察と今後の対応」とあるが，非常に抽象的な部分がある。アンケートを実施しなくてもこれ位の内容なら普段から出しているはず。

具体的に，場合によっては教材まで出せる位でないといけない。そこまで分析しないといけない。公表するのはそのエッセンスだけでもよいと思うが。そうしないと，努力目標になってしまい，次の自己評価につながらない。また，これは学校運営協議会との連名になっているが，学校運営協議会としてのアピールも大切。学校からのお願いという形ではなく「我々としてどうする」という形を具体的に示していただくとうよい。

小野 「重点目標2 自分の言葉で表現できる子」の部分。授業がわかるかと聞かれているのか、日常生活上のことを聞かれているのか、文面から汲み取れず曖昧な項目だ。

鮎川 アンケートで使う言葉は難しい。我々も勉強しなくてはならない。回答しづらいという声を何人かから聞いている。前回のパートナー会議からまち作り会議に持ち帰り、協力を要請した。町を作るにはあいさつは基本だ、是非町全体で取り組んでいきたいということになった。機会があればこのことについて紹介していきたい。あいさつには厳しい判断をしている大人もいる。アンケートで敢えてこの項目に厳しい評価をし、直してほしいという希望があるのかもしれない。

天笠 重点目標のあいさつ、このテーマは学校と地域をあげて取り組むもの、地域にも努力する点があるんだという類のもの。2番目の重点目標(自分の言葉で表現できる子)は学校が授業中にがんばるもの。学校と地域の役割分担がある。あいさつへの取り組みは学校と家庭が一体となって行うもの。現状がこうだからそれぞれが次は何をなすべきかという提起の仕方をし、それを公表すべきではないか。

(2) 次年度の学校評価計画について

平山 (資料に基づいて提案)

天笠 基本的枠組みが決まったら省力化・簡略化を図ること。この学校はひたすら評価を追求している感がある。やるべきことがあるからこそ、それに評価がついてくるはず。これまではこれ自体が目標だったが、骨格ができたので、この内容を維持できればよい。これからは、何をすべきか、そしてその関連で評価を行っていくという方向を大切にしたい。

小野 保護者は、教師が子どもをある程度きっちり導いてくれればそれでOKだ。細かく文句を言わなくても済む程度に教育してくれればよい。自分から積極的に関わりたいという意識の強い保護者は、正直なところ、いないと思う。何か問題が起きた時に「これはこうではないのか」という方がいらっしゃる程度だ。学校で子ども達が楽しく勉強し遊ぶのは当たり前なことではないのか。子ども達が8割方満足して1年を過ごし、教師側も努力してくれたという結果は、保護者からすると、それで?という感じがする。毎年アンケートは、受け取る側からはマンネリ化して見え、次への期待を抱きにくくなっている。同じことを同じようにやっていくのが学校ではないのか、と思う。結果をよく考察し、今年はどうしていくということが、一番聞きたい。細かな点までは、親にはわかりかねる。

沖田 アンケートが多いといったら文科省の方針と言われたが、何か違うような気がする。

原田 評価の選択肢に「そう思う」「やや思う」「あまり思わない」「思わない」の4つがあるが、「そう思う」と「思わない」の2つでよいのではないか。項目も次第に小さくなる傾向にあるが、人間は多面的なので、あまり小さくしすぎるとその人の本当の姿が見えない。もっと大きな「くくり」でその人を見ていかないと、見誤ってしまう。中間の選択肢は必要ない。

小野 「ができていいる」とはっきり自信を持って明言できる人は少ない。

沖田 あいさつなど、100%できる人はいない。ある程度できればよいのではないか。あいさつを返さない人だっている。大きな「くくり」で人を見ないといけない。人は機械ではない。

天笠 スケジュールを修正せよ。9月保護者アンケート、次にボランティア等々のアンケート、10月に校長はじめ教職員のアンケート、の形に修正するとよい。

(3) 次年度の学校運営について

菅 (資料に基づいて提案)

原田 なぜ「運動を好きになる」という標題をつけるのか、と疑問に思う。「遊びが好きになる」という標題にしてほしい。「運動を好きになる」は適切な表現ではないと思う。小学校なのだから、子どもはもっと遊んで体力をつければよい。

菅 低学年，中学年，高学年，中学，高校とその時期にあった運動がある。病気に対する知識・理解なども，子どものレベルにあった理解が必要だ。心の問題もある。

原田 子どもの手紙に，よく縄跳びが出てくる。連続200回はすごい。あれなどはよい体力作りになる。

菅 今の子は，朝会などで長い間立っていられないし，じっとしていられない。首から上野怪我も増えている。意外な骨折も多い。ドッジボールで突き指かと思うと，骨折だったり脱臼だったりする。子どもの体に異変があるのだと思い，そこに手をつけていきたいと思う。

鮎川 日本人は一番食べ物を捨てると言われている。食育を含んだ教育，きちんと食べられるという子どもにしていきたいと思う，家庭でもそれは同じだが。せっかく作ってくれたものを喜んで食べる指導をしてほしい。

天笠 ここが，今日の学校運営協議会で一番大切な点。学校の方向性等々を了承するかしないか，要望等々を示してもらったのだが，このまま進めていければと，思って聞いていた。そうすると，「あいさつ」とか「自分の言葉で表現」とか「運動」などをどう組み立てるか，という話になると思う。その時に，「たくましい子」を最上位の概念に起き，その3つの柱に「あいさつ」と「表現」と「運動」をおけばバランスがとれ，「生きる力を育てる」ということにもつながっていく。「自分の言葉で表現する」は今回の学習指導要領の内容とも一致する。ここら辺をうまく整理するとよい。食に関する教育も「バランスのとれた体力作り」の中に位置付くと思う。「バランスのとれた」の中には心の問題も含まれる。この中には携帯電話など，情報に関する裏サイト云々という話も関連して出てくると思う。これらの組み立てが大事。

小野 自分の言葉で表現するには，自分の意見や思いを受け止めてくれる受け皿がなくてはならないが，子どもに「何かしてください」という要求ばかりのように思える。

天笠 受け皿になるのはB(学校経営の基本)である。Bがそのためにこうします，と6本の柱を作っている。こんな環境を作る，と私は読み取った。できれば，この中に授業改善を入れてほしい。授業改善は永遠のテーマ，授業力を維持するための方策を位置づけてほしい。

沖田 この方向に賛成。だんだん問題が見えてきている。あいさつなども，家庭の中でのあいさつが大事となった。この3つの目標でよい。

(4) パートナー会議運営要項について

平山 (資料に基づいて提案) 改訂する点があれば改訂する

- 特に問題なし - - 協議事項終了 -

井上 地域が先生以上に学校を理解しているようで，大変うらやましい。今後も続けてほしい。佐倉や香取にもこうした動きが広がっている。秋津の取り組みが広がってほしい。

長尾 県教委としても，こうした取り組みを広げていきたい。秋津はまさに，県のトップランナーである。こうした動きの先端を行っている。広く県下に広報して徐々に輪を広げていきたい。

5 その他

(1) 次年度の学校運営協議会の大まかな開催日について

次回の開催日は，5 / 11 (月) の予定。